

た

たとえばインターネットを使っていけば避けがたく私たちの目に飛びこんでくるバナー広告——「めざせ！○○万円プレーヤー!!」。こうした文言に象徴されるように、ネオリベリズムに支配された私たちの日常は、職業から娯楽まで、机から寝床までかくもマネーゲーム化している。努力や資質、性格や感情、あるいは停滞や休息といった私たちそれぞれに異なる身体的精神的事情が、労働と余暇の差異、消費と再生の区別をかきりなく曖昧にしようとする資本の要求によって、金銭の多寡という電子的数値に還元されていくのだ。

そのなかで私たちの感情はすり減らされ、言葉は貧しくなり、思考が停止する。それが私たちのおかれた状況だとすれば、そのような現実には抵抗するには言葉と思考と情動によるしかない。まさにそのような試みの先陣をきって二〇〇五年に出版された「ネオリベ時代の日常生活批判の手引き書」にして「現代日本を読み解くバイブル」がこのほど増補された。編者がともに文学を専攻する大学非常勤講師であることはもちろん偶然ではない。彼らはこの国の大学教育を根幹で支えながら薄給と不安定な地位に甘んじなくてはならない「非常勤」という立場から、「新自由主義」を（ネオリベ）と

「侮蔑をこめて呼び捨てに」し、それに支配されている私たちの日常を、文学と芸術が可能にする言葉と思考と情動の復権によって救済しようとするのだ。

本書にはネオリベの本質と来歴と現状、その具体的事例、対策、そしてそれを越えた喜びと希望の全てが語られている。私たちの日常生活の全局面を支配しようとするネオリベリズムへの反攻として、取り上げられる話題や分野も多岐にわたる。大学非常勤講師の解雇、教育基本法改正、労働と消費、精神分析と心理学、運動と政治、大学

と教養、そして学費無償化とベ—シックインカム。それをきわめて明晰に、しかし怒りとユーモアを交え、熱く快楽をもって、すなわち本来の意味で教育的に語り、聞き、編者とともに紡いでいく人たち（入江公康、樫村愛子、矢部史郎、岡山茂、堅田

香緒里の各氏）の言葉には、自分を高みに置いた分析の代わりに冷静な判断力があり、個への埋没と切斷への誘惑ではなく連帯への励ましと愛の力がある。それはカヴァーを飾るアゲマツ・ユウジさんの「都市のゴミ」の写真が喚起する「物質の力」にも密やかに生成。ニューヨークでも東京でも都市を支配するネオリベ資本主義は「ゴミ」を日夜廃棄しながらそれを浄化し続ける。捨てられたベクトポトルが一〇〇円ショップの商品に生まれ変わるように。しかしその「便利」のなかでゴミ化されているのは私たち自身の身体と情感なのだ。まずはそのような自らの生と性を圧倒的に肯定することから始めよう、本書はそう高らかに宣言する。

きんぎょくぶんが 読書



『増補 ネオリベ現代生活批判序説』
白石嘉治・大野英士＝編
新評論
2400円（税別）
ISBN978-4-7948-0770-0

書評委員
北原みのり 五所純子
陣野俊史 本橋哲也

ユートピアを語らねば
なにも始まらない
本橋哲也

「ユートピアを語ることなしに、現実へのコミットメントはありえないはずである」——「増補あとがきにかえて」にある白石さんのこの一行を読むためだけでも本書を開く価値は無限にある。インターネットと携帯電話とテレビを半日見ないで過（あま）し、その代わりにこの本の全頁を一字一句貪（あま）るように、ゴミを漁（あさ）るように読もう。その半日であったの人生は変わる。そのときあなたはすでに、ネオリベの暴力に自らの身体と感覚であらう戦士となっているはずだ。